

東国防人の光と闇

― 万葉集卷二十・四四三六番歌について ―

間江 立恵

一・昔年相替防人歌一首

万葉集卷二十には大伴家持によって聚められた古代東国防人たちの歌の集団がある。所謂「防人歌巻」（伊藤博『萬葉集の歌群と配列下』古代和歌史研究8）を中心とするこれらの歌群は四三二一番歌に始まり、間に防人に関する家持の詠作、長短歌二〇首を挟みながら、四四三六番の歌まで計一一六首。大宰府守備に派遣するため、東国から徴集された防人たちの数多くの歌が並んでいる。すべては天平勝宝七歳二月、春の難波津のことであった。

歌巻の最棹尾に、おそらくは追補の形で、ばつんと載せられているのが次の一首である。

昔年に相替りし防人が歌一首

闇の夜の行く先知らず行く我れをいつ来まさむと問ひし子らはも

（20四四三六）

上三句では、どこへとも知らず連行される「我れ」の運命が沈痛に語られ、下二句は「子らはも」の詠嘆とともに妻への深々とした思いをうたう。家族と別れ、はるかな地へ旅立たねばならなかった当時の

防人たちの心情を代表してうたった一首といえる。

まず何よりも、孤影ともいふべき一首のたたずまいが気になる。表現において内容において、他の防人歌と一首はおおいに異なっている。上句についていえば、自らの明日への不安をうたう点で特異といえる。たとえば、同じ防人歌巻にありながら、次の二首とは真反対の心境をうたっている。

今日よりはかへり見なくて大君の醜の御楯と出で立つ我れは

（20四三七三）

天地の神を祈りてさつ矢貫き筑紫の島をさして行く我れは

（20四三七四）

下野国の防人部領使、正六位上田口朝臣大戸の進った一首の歌のうち冒頭の二首。「今日からは後ろを振り返って案じたりすることなく、大君の醜の御楯として出立して行くのだ、この俺は。」（新潮日本古典集成『万葉集』、以下『集成』という）とうたい起こす「火長今奉部与曾布」の歌（四三七三）に続けて、同じく「火長」である「大田部荒耳」が「天地の神に無事を祈って、矢を背中の鞆にさし貫き、筑紫の島を目指して遙々行くのだ。この俺は。」（『集成』）とうた

う（四三七四）。当該歌と同じように明日をうたう歌でありながら、この二首には随分前向きな姿勢がみてとれる。作者は「大君の醜の御楯」としての自覚を持ち、防人としての自らの立場を認識している。

また、「筑紫の島」という到達点もはっきりしており、当該歌の「闇の夜に行く先知らず行く我れ」とはまさに真反対である。

とはいえ、その大半が後向きな姿勢に立ち、別れの悲しみをうたう防人歌の中にあつては、むしろこの二首のほうが珍しい歌ともいえよう。それに関して、吉野裕『防人歌の基礎構造』は次のように述べている。

この今奉部与曾布の不朽の絶唱は、かれが「火長」であつたこと、すなわち十人の長として部下を率領するべき地位にあつたのだから、そうした「火長の覚悟」（万葉秀歌）でうたっているのでもあるが、こうした決意を披瀝しかつ誓うことは、防人のうたげの座の伝統的な方式に従つたものであつて、火長というその地位をもつてかかるうたげの座の開口発声者となつていゝのである。

「火長」とは兵士十人の長を指す。『律令』の「軍防令」には「凡そ兵士は十人を一火と為す。火別に六の駄馬を充てよ」とある。

また、伊藤博『萬葉集釋注』（以下『釋注』という）も、これらの二首がいくらか前向きな姿勢でうたわれた歌とはいえ、やはり「防人歌の根本は悲別の歌」であることを指摘している。伊藤氏は同著の四三七三番歌釈文において、次のように述べた。

今の歌の「今日よりはかへり見なくて」の背後に、深刻な悲別の

情がこめられていることである。出発する今日の只今まで、作者は雑念払いがたく、悩みに悩んでいたのである。行くことを厭うその苦しみや悲しみを押さえつけて無理矢理出で立とうというのである。……中略……抗いがたい大君の命令に対比して思いが述べられているだけ、これらの歌々の方が苦しみはむしろ深く重くともいえる。

対して当該歌は、ただ真直ぐに自らの明日を見つめ、その「闇の夜」のごとき暗い未来を、そこに見えるままうたっている。全体に後向きである防人歌の中で「行く先」という未来を向いていること、また、同じように未来を向いた四三七三・七四の二首と比べても、その心境の真反対であること、一首を「孤影」と称した所以である。

また下句についていえば、妻との別れをうたつて痛切この上ない次のような防人歌なども、おおいに様相が異なる。

我が妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えてよに忘れず

（20四三二二）

我が妻も絵に描き取らむ暇もが旅行く我れは見つつ偲はむ

（20四三二七）

四三二二番歌は遠江国の主帳丁、鹿玉郡若倭部身麻呂の作、四三二七番歌も同じく遠江の防人の作で、作者は長下郡物部古麻呂である。これらの二首は、ともに特異な表現を含み持つ歌で、たとえば四三二二番歌では、第三四句「飲む水に影さへ見えて」という表現が珍しい。『代匠記』初稿本に「のむ水にみゆる影は我影なれども、

それによせて妻がおもかげをいふなり」とあるように、難波津までの途上、飲む水に映る自分の影に重なって妻の顔が見え、ちっとも忘れられないというたう。集中、水に映る影をよむ例はいくつかみられるが、人の顔が面影として水に映るとうたった例は一首の他に存在しない。また、上二に「我が妻はいたく恋ひらし」とあるのをみると、相手が自分を恋うることによってその姿が水に映る、という俗信が上代にあったことが推測される（『集成』）。窪田空穂『万葉集評釈』（以下『評釈』）という）には、

上代人は、相思う者の心霊は通い合つて、その人に添っているものとし、夢もそれであるとした。今も、妻が甚だしく我を恋うるので、心霊が我に添っているとし、その心霊が面影となって映つたものと見たのである。事としてはわが顔であるが、そうした心理状態から妻の顔と見えたのである。

とある。当然ながら、水に映る顔が妻の顔に見えるのは、作者自身が妻を恋しく思うからである。意識の定まらぬ夢においてならいざ知らず、現実の水面に妻の顔が見えるとは、よほど妻恋しさが募った結果といえよう。「飲む水に影さへ見えて」という表現は、愛しい妻との惜別を経て行く防人の旅においてこそ生まれえたものではないだろうか。そのことで、作者の心情はことさら痛切に響くのである。

また、二首目の四三三七番歌も、妻を絵に描き取るという発想に特異性がある。鴻巣盛広『万葉集全釈』（以下『全釈』という）は、集中数千首の恋歌の内、妻の肖像を画き写して携へたいと言つた

例は他に一もない。当に大宮人輩を睦若たらしむべき秀逸である。文化の進んだ都人だに思ひつかない勝れた構想が、東国の防人によつて、詠まれてゐることに注意しなければならぬ。と述べている。

また、「わが妻をせめて絵に描きうつす暇があつたらな」（『集成』）とうたう上三句は、当時、防人となるべき命の下るのと、出発との間に余裕がなかったことを示している。このような例は他の防人歌にも見られ、

水鳥の立ちの急ぎに父母に物言ず来にて今ぞ悔しき

（20四三三七）

防人に立たむ騒ぎに家の妹が業るべきことを言わず来ぬかも

（20四三六四）

などはその例である。

出発まで余裕がないために家族に充分な別れを言えなかったことや、妻に家の生業を教えきらぬまま来たことを嘆いている。これらの歌によまれた嘆きは、『評釈』が「枝葉の一點に對しての嘆き」と述べたものであろう。つまり、「根幹を成す」妻との別れに関しては潔く諦めて触れず、ただ絵に描き取る暇がなかった、家の生業を教え切れなかった、その一点をのみ嘆いている。だからこそ、その嘆きは様々な嘆きの入り混じった濁りのようなものを一筋に突き抜けて、哀しい。澤瀉久孝『万葉集講話』にいう「単純の美」を、巧まずして表現し得ている一首といつていい。

対して当該歌の下句には、我が心情とは無縁にみえる妻の一言「いづれ来まざる」が語られているのである。また、作者の出身地や名前の明記された他の防人歌に比べ、この歌の背景は実にはんやりとしている。題詞には「昔年相替防人歌一首」としか記されず、まるで投げ捨てられた独り言のような歌である。

かろうじて四四三九左注には、一首の伝誦者として「上総の国の大掾正六位上大原真人今城」の名が記されている。しかし、他の防人歌の場合、国ごとに集められた防人たちの歌群の結びに、「二月の六日、防人部領使遠江の国の史生坂本朝臣人上」進る歌の十八首。ただし、拙劣の歌十一首有るは取り載せず」というような細かい注が付けられている。対して、当該歌はいつどこで今城が聞いたものかということすら知らされない。ただ、今城が「上総の国の大掾」であったことを考慮すれば、東国の地で直接聞いたものかとも推測されるのだが、いずれにせよ定かではない。そのためであろうか、ほとんどの注釈書はこの歌についてさほど熱心な解釈を施していないのである。

以上、一首が持つ特異性のいくつかを指摘してみた。他と変ったうたいぶり、それでいて哀切に迫ってくる一首が持つ魅力、一体それらは奈辺に由来するものなのか。本稿の考えるところをいささか述べてみたい。

二 第二句「行く先知らず」

初句「闇の夜の」の表現は集中唯一例で、他に

闇の夜に鳴くなる鶴の外（たづ）のみに聞きつつかあらむ逢ふとはなしに

(459二)

闇の夜は苦しきものをいつしかと我が待つ月も早も照らぬか

(7137四)

などの近い例があるが、一首のごとき熟し方を見せていない。これについて、契沖の『代匠記』が「發句ハ、行サキシラスト云ハム料ナリ」と述べて以後、多くの注釈書が「行く先知らず」を導く枕詞、あるいは「闇夜ノ如ク」（井上通泰『万葉集新考』）の意、と簡単に捉えている。

しかし、初句「闇の夜の」が一首全体に与えている影響の深さを考えると、これまでの注釈書の解釈には物足りなさを感じる。一首のもつ悲しみや絶望感を効果的に表す「闇」という語を含んだ初句を、単に枕詞と解してよいのであろうか。続く第二句との関連において考えてみたい。

とりあえず、ここでは多くの注釈書が解しているように枕詞として「闇夜のように行く先が分からない」と意味をとり、続く「行く先知らず」の意味について考えを進めよう。

「行く先知らず」は、初句「闇の夜の」と共に集中唯一の表現であるが、「し知らず」とうたう歌なら、集中に一四〇例と多くみられる。

そしてその中には、「行く先」と同じように、「未来・将来」の意味を持つ「ゆくへ」や「奥処」、「末」などの語を含んだ「ゆくへ知らず」「奥処知らず」「末知らず」といった表現も存在している。すなわち、当該歌の「行く先知らず」と同じように「未来も分からず」という意味を持つ表現である。こうした表現を含み持つ歌々をみたとき、そこにはある特徴が浮かび上がってくる。それは、「ゆくへ知らず」「奥処知らず」「末知らず」の表現が歌の結句に置かれやすい、という特徴で、たとえば「ゆくへ知らず」を含み持つ歌に関しては、次の一〇首のとおりである。

1……そこ故に皇子の宮人 ゆくへ知らずも (2一六七)

2 埴安の池の堤の隠り沼のゆくへを知らに舎人は惑ふ(2二〇二)

3 もののふの八十字治川の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも (3二六四)

4……もち鳥のかからはしもよ ゆくへ知らねば 穿香を…… (5八〇〇)

5 大伴の御津の浜辺をうちさらし寄せ来る波のゆくへ知らずも

6 あまたあらぬ名をしも惜しみ埋れ木の下ゆぞ恋ふるゆくへ知らず (7一一五一)

7 みささ居る沖つ荒磯に寄する波ゆくへも知らず我が恋ふらくは (11三七三九)

8……伊香胡山いかに我がせむ ゆくへ知らず (13三二四〇)

9……立ちて居てゆくへも知らず 朝霧の思ひ迷ひて…… (13三三四四)

10……さ夜更けてゆくへを知らに 我が心明石の浦に…… (15三六二七)

一〇首中半数にあたる13568の五首において「ゆくへ知らず」という表現は結句に置かれている。また、4の長歌に關しても、破調によつて「ゆくへ知らねば」のところで一旦流れが切れている。つまり、4の歌の「ゆくへ知らねば」も、結句と同じような位置に置かれているといえよう。

さらにもう一つの特徴として、279のように「ゆくへ知らず」が結句に置かれていない歌では、「ゆくへ知らず」とよんだ後、「惑ふ(迷ふ)」や「恋ふ」という動詞が続く場合が多いということもいえるだろう。「ゆくへ知らず」とは即ち、未来や将来の見えない状態を表す。未来の見えぬ不安な時、人はただ「惑(迷)」い、恋愛であればひたぶるに「恋」うしかない。「ゆくへ知らず」の後に「惑ふ(迷ふ)」や「恋ふ」という動詞が続くのは当然のことかもしれない。なお、「ゆくへ知らず」にみられた特徴は、「奥処知らず」と「末知らず」のよまれた歌においても同様にいえることである。

しかし、これらの歌の中で一首だけ、「知らず」という表現に「行く」という動詞が続けた例がある。卷十七の三八九七番歌である。大海の奥かも知らず行く我れをいつ来まさむと問ひし子らはも

(17三八九七)

一見して気付くのは、一首の第三句以下が当該歌と全く同じということだ。巻十七の家持歌日記冒頭部に位置するこの歌の有様をみてみよう。

天平二年庚午の冬の十一月に、大宰帥大伴卿、大納言に任けられてと旧の京に上る時に、廉從等、別に海路を取りて京に入る。ここに羈旅を悲傷しび、おのおの所心を陳べて作る歌十首

我が背子を安我松原よ見わたせば海人娘ども玉藻刈る見ゆ

(17三八九〇)

右の一首は、三野連石守作る。

荒津の海潮干潮満ち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ

(三八九一)

磯ごとに海人の釣舟泊てにけり我が船泊てむ磯の知らなく

(三八九二)

昨日こそ船出はせしか鯨取り比治奇の灘を今日見つるかも

(三八九三)

淡路島門渡る船の楫間にも我れは忘れず家をしぞ思ふ(三八九四)

たまはやす武庫の渡りに天伝ふ日の暮れ行けば家をしぞ思ふ

(三八九五)

家にてもたゆたふ命波の上に思ひし居れば奥か知らずも^{「居れば」}

(三八九六)

●大海の奥かも知らず行く我れをいつ来まさむと問ひし子らはも

(三八九七)

大船の上にし居れば天雲のたどきも知らず歌ひこそ我が背

(三八九八)

海人娘漁り焚く火のおぼほしく角の松原思ほゆるかも

(三八九九)

右の九首の作者は、姓名を審らかにせず。

歌群一〇首中の第八首である。旅の歌という点で当該歌と共通する。但し、一群の歌々は当該歌と大きく異っている点が一つある。廉從らの旅が故郷へと向かう、いわば旅の復路である点だ。その点、当該歌の悲痛さに一首は本質的に及ぶべくもない。

また、第三句以降が全く同じである理由は分からない。あるいは大宰府で当該歌を直接に聞くことがあつての作だろうか。

「ゆくへ知らず」「奥処知らず」「未知らず」と未来の不明をうたうとき、その表現が結句に置かれていない場合は、続けて「惑ふ(迷ふ)」や「恋ふ」といった動詞をとることが自然であった。しかし、当該歌とその類歌だけが「行く」という動詞をとっている。ここに、二首の歌の特徴が表れているといえないだろうか。つまり、未来の分からぬ状態で、それでも「行く」という辛さである。「惑(迷)」ったり「恋」うたりすることは許されぬ、ただ「行く」しかない旅の過酷さである。防人の旅の過酷さを語る資料として、「軍防令」には次のようなものが見られる。

a 凡そ兵士の上番せむは、京に向はむは一年、防に向はむは三

年。行程計へず。

b 凡そ防人防に向はむ、各私の糧もて。津より発たむ日には、
随ひて公糧給へ。

c 凡そ旧の防人替へ訖りなば、即ち程糧給ひて発て遣れ。

a は衛士・防人の上番の年限に関する規定である。これによると、
防人の任期は三年となっているが、任地に赴くまでの日数は数えない
とある。また、bとcの資料からは、大宰府までの旅の中間点にある
難波津までの食料は持参すること、任期が終わった防人たちは食料を
持たされ、現地解散であったことなど、厳しい旅の条件が窺える。

「闇の夜の行く先知らず行く我れを」とうたう上三句の表現には、
防人として西国の果てへ向かう旅の苦しさが滲み出ている。

三 第四句「いつ来まさむと」

次に一首においてもっとも重心のかかる下二句の表現についてみて
いこう。第四句の「いつ来まさむ」について、ほとんどの注釈書が「い
つお帰りになるでしょう」というように、「来」を「帰」に置き換え
て口語訳している。こうした口語訳の違いは、それぞれの注釈書にお
いて、想像される一首の背景に基本的な差を与えている。たとえば当
該歌の理解には、それぞれ次のようなものがある。

歌意は、行さきを知ず、悲しさにくれまどひつ、行吾を、戀慕ひ
て何時本郷には還り来まさむやと、泣々問し妻はいづらや、と慕

ひ尋る意なり（鹿持雅澄『万葉集古義』）

防人が家を出て旅をしつつ、別れた際の妻を思ひ出しての憐みで
ある。「何時来まさむと」が中心で、防人はその妻の世間知らずの、
さながら子供のやうなのを、愛しあはれんだのである。防人が若
いので、かうした事もあり得ることである。（『評釈』）

作者の妻について、『古義』が「泣々問し妻」を思い浮かべたのに
対し、『評釈』は「世間知らずの、さながら子供のやうな」妻を想定
する。当該歌には、妻の言葉として「いつ来まさむ」の一言しか語ら
れていないにも関わらず、各注釈書の間には、このようにかけ離れた
歌の理解が存在しているのである。

一首の本意に真に迫ろうとするのであれば、歌にのみ込まれた一語
をも慎重に読み解こうとする姿勢が不可欠であろう。先に指摘したよ
うに、当該歌の第四句によまれた「来」という語が多くの注釈書にお
いては「帰」に置き換えて口語訳されている点についても、再度丁寧
に考察し直してみる必要がある。たとえば、「帰る」という語は万葉
集に七三例存在し、中には次のような歌も見られる。

年も経ず^へ帰り来なむと朝影^{あさかげ}に待つらむ妹し面影に見ゆ

（12三三三八）

一首を、たとえば『集成』は次のように訳す。

年の変らぬうちに帰って来てほしいと、朝日に映る影法師のよう
に痩せ細って待つているに違いない妻、その妻の姿が目の前にち
らついて見える。

一首の「帰り来なむ」との一句は当該歌と一見似通っている。旅にある夫の帰る日を今か今かと待つ妻。その面やつれた姿を思い浮かべながら旅路を行く作者。背景において二首の歌は同じである。しかし、三三三八番歌は当該歌の「来まさむ」とは異なり、「帰り来なむ」とうたっている。「来」の語の前に「帰る」がある。この二首の例を見る限りでは「帰る」に「来る」という語が付くことが付くまいが、意味の上では大きな違いはないように思われる。このような例が見られるため、当該歌に関しても、多くの注釈書にあるような「いつお帰りになるでしょう」といった口語訳が生まれるのであろう。しかし、次のような例はどうであろうか。

丹比真人笠麻呂、筑紫の国に下る時に作る歌一首并せて短歌

白袴の袖解き交へて帰り来む月日を数みて行きて来ましを

(4五一〇、五〇九反歌)

『集成』は一首を、

できることならすぐにも、袖をかわし紐を解いて妻と寝て帰って来たい。筑紫到着までの日数を数えて、その間に家まで一走り行って来たいものだ。

と訳す。長い船旅の途中で、妻に逢いたいとうたった一首である。作者は自分が船に向かうことを「帰り来む」、妻のもとへ向かうことを「行きて来」と表わしている。この歌の例から、万葉集では「帰」という語が案外厳密に使われていたということが窺える。つまり「帰」という語は、本来あるべき場所に戻る、という意味でのみ用いられており、

「来」との混同はない。作者笠麻呂の「帰る」場所は、たった一瞬でもいいから逢いたいと思う妻のもとではなく、自分のいるべき旅の中にあるのである。

男性の「帰るべき場所は妻のもとではない。そのことは、今まであげてきた羈旅歌の例ではなく、相聞歌を見ればはっきりと分かることである。

春山の友うぐひすの泣き別れ帰ります間も思はせ我れを

(10一八九〇)

右は卷十春相聞の第一首目に置かれた歌で、夫を送る妻がよんだ作である。

春山の鶯が、友の鶯と互いに鳴き交して別れるように、泣く泣く別れを惜しむ私と別れてお帰りになるその道中でも、ずっと思っている下さい、この私のことを。(『集成』)

夫が自分のもとを離れることを「帰ります」と表している。これは、古代の婚姻形態が、結婚後も夫婦が別居の形をとる「通い婚」であることを考えれば当然のことで、その場合、夫婦の関係は夫が妻の家を訪れることによって維持されていた。

こうした古代の婚姻形態を考えれば、女性からみて、夫である男性は自分のもとに「来て」「帰る」っていく存在であるといえる。集中によまれた「来」という語を調べても、全一七八例中の約半数に近い八三例が「妻間に来る」の意で用いられている。したがって、夫は当該歌の場合も「帰って来る」のではなく、ただ単純に「やって来る」の

であろう。

当該歌の口語訳において、第四句「いつ来まさむ」の部分で、右のごとく原文に忠実に訳したのは、武田祐吉『万葉集全註釈』（以下『全註釈』という）と岩波日本古典文学大系『万葉集』（以下『体系』という）のみであった。その他、主な注釈書を合わせて、以下古い時代順に列挙する。

まるで、闇の夜の闇がりを歩く様に、行く先もわからず、お先まつくらに、旅に行くわたしだのに、何時になつたら、歸つていらつしやるでせう、とわたしに（別れぎはに）尋ねた、あのいとし人は。あ、どうしてゐるだらうか。（折口信夫『口訳万葉集』）

闇の夜のやうに、行く先も知られずに行くわたしだのに、何時お歸りになるだらうか尋ねた、かはゆい妻はなあ。（『評釈』）

闇の夜のように行く先を知らずに行くわたしだのに、何時おいでになりますかと尋ねた妻はなあ。（『全註釈』）

ヤミノヨノ（枕詞）行く先も分らず行く私を、何時歸つて来られようかと、言つたをとめはまあ。（土屋文明『万葉集私注』）

闇の夜の行く先も分らないように将来のことが全く分らず防人に立出る自分を、「何時おいで下さるでしょう」と訊いたあの子は、ああ。（『大系』）

闇の夜のやうに、行く先もわからず行く自分を、いつお歸りになりますと尋ねたあの子はナア。（澤瀉久孝『万葉集注釈』）

闇の夜のように、これから先どう行くのかもわからずに出かける東国防人の光と闇——万葉集卷二十・四四三六番歌について—— 間江 立恵

俺なのに、そんな俺に向つて、いつお歸りになりますと尋ねたあの娘は、ああ。（『集成』）

（闇の夜の）行く先もわからずに出て行くおれにいつ帰るのと尋ねたあの娘よ（木下正俊『万葉集全注』）

「闇の夜の」とこへ行くのか、どうなるかも全く分らずに、不安な気持で防人として出て行く俺なのだが、その俺に「いつお歸りになりますの」と尋ねた、ああ、（いとしい）我が妻よ。（水島義治『萬葉集防人歌全註釈』）

「おいでになりますか」と「お歸りになりますか」では、その意味するところは真反対である。口語訳においては小さな差に思えるけれども、歌の解釈を広げる際、この差が大きな違いを呼ぶこと、先に『古義』と『評釈』の例を以て確認した通りである。

以上のことから、夫は妻のもとに「帰ってくる」のではなく、「やって来る」存在であったことが分かる。しかし、ここでまた新たな疑問が生ずる。すなわち、先にあげた三三八番歌のように、旅行く夫に對して妻が「帰り来なむ」と呼びかけた歌がある所以である。しかし、その答えは次の一首が解決してくれる。

天平五年に、入唐使に贈る歌一首并せて短歌作主いまだ詳ならず
そらみつ大和の国 あをによし奈良の都ゆ おしける難波に下り
住吉の御津に船乗り 直渡り日の入る国に 任せらゆる我が背の
君を かけまくのゆゆし畏き 住吉の我が大御神 船の舳に領
きいまし 船艫にみ立たしまして さし寄らむ磯の崎々 漕ぎ泊

てむ泊り泊りに 荒き風波にあはせず 平けく率て帰りませ
もとの朝廷に (19四二四五)

反歌一首

沖つ波辺波な越しそ君が船漕ぎ帰り来て津に泊つるまで

(四二四六)

題詞には「天平五年に、入唐使に贈る歌一首」とある。作者未詳の歌ではあるが、旅にある夫の無事を祈る妻の立場でよまれたことは確かであろう。長歌結句によまれた「もとの朝廷に」に注目したい。三三八番歌では「帰り来ませ」とあるだけで、どこに「帰」るのか、その場所までは明示されていなかった。そのため、我々は現代の感覚で「自分のもとに帰ってきてください」と単純にとつてしまいがちであった。その点、右の長歌では「率て帰りませ」に続け、夫の帰る場所が結句にはっきりと示されている。それは「もとの朝廷」、つまり作者のいる大和の国なのである。

旅にある夫に妻が「来ませ」「来て」と呼びかけたところで、間近い直の逢いは不可能である。だからこそ、夫の帰りを待つ妻は「帰り来ませ」「帰り来て」とうたったのではないだろうか。つまり、本来あるべき場所に戻る、という意を持つ「帰る」の語を付して呼びかけることによって、そこにはただ逢えることのみを願って呼びかける「来ませ」「来て」などの表現以上に、遠く国を離れ旅にある夫の帰還を願う思いが込められ、夫の無事を思う妻のより深い折りの表現となっているようにも思われる。

以上のことを踏まえて当該歌をみると、第四句「いつ来まさむと」は、通行の解釈ではあまりにも不自然である。防人という生還を期待できない過酷な旅に就こうとしている作者に向かって、「何時いらつしやるの」と尋ねる妻があるだろうか。「軍防令」に記されていたような防人の旅の実態を多少なりとも知っている妻なら、ここは「帰」という語を用い、「早帰りませ」や「帰り来ませ」というべきであろう。「いつ来まさむ」と尋ねたのは、『評釈』がいうように「世間知らずの、さながら子供のやうな」妻であつて、防人がどのようなものであるか知らなかったとしかいいようがない。あるいは夫が防人に行くということさえ知らなかったのかもしれない。『古義』にあるような「泣々問し妻」といった解釈に疑義を呈する所以である。

四 光と闇

生還の可能性が極めて低い古代防人の旅の実態を考えたとき、当該歌の作者は朝の別れの際、これが妻との今生の別れになるであろうという覚悟があつたのだろう。まさに自分は、闇の夜のように行く先も知れぬ過酷な旅に出発しなければならぬ。そんなとき、「世間知らずの、さながら子供のやうな」妻はいつものように、「今度はいついらつしやるの」と尋ねた。妻の心には、夫がいつも通りにやって来るといふ日常の幸せな風景が当たり前のこととして想像されている。妻の無邪気な問いに、夫はどんな言葉を与えようとしたのだろう。何も言え

ず、彼女が疑いもなく描いている未来を、眩しい光でも見るように、切ない気持ちで見つめたのかもしれない。下二句「いつ来まさむと問ひし子らはも」には、辛い旅に行く作者の思い浮かべた、出発前の妻との明るい幸せな日常が歌われている。それはまるで闇を照らす光のように、作者にとって眩しく切ない光景であつただろう。

下句によまれた光が明るければ明るいほど、上句の闇は濃さを増す。あるいは逆に、現実の旅という闇がどうしようもなく暗いからこそ、想像の中の日常の光がより明るく眩しく感じられるのかもしれない。どちらにしても、この上句と下句によまれた闇と光の対比が、一首において作者の苦しい心を一層強く浮かび上がらせる効果を持っているのである。

このように一首を解釈すると、初句「闇の夜の」の一句がもつ意味も変わってくる。単に枕詞というだけでは弱すぎる。その効果は序詞のそれと同じ程度の強さを持つように思われる。「闇の夜の」は「行く先知らず」を導き出すという働き以上に、この歌全体を闇の色で覆い、そして下句の光を一層際立たせる、重みある表現として初句に置かれていられるだろう。

注

(1) 一首の伝誦者「上総國大掾正六位上大原真人今城」は、天平十一年三月までは「今城王」、天平宝字元年以後の関係歌には「大原今城真人」と称されている。また『続日本紀』には「大原真

東国防人の光と闇——万葉集卷二十・四四三六番歌について—— 関江 立恵

人今木」とある(天平宝字元年五月)。卷四・五一九番歌の題詞に「大伴女郎歌一首今城王之後世今城王」とあるため、母は大伴氏ということが分かる。旅人の妻「大伴女郎」と同一人物と見、今城を家持の異父兄弟とする説もあるが(『攷証』)、たとえ同一人物でなくとも、女郎が大伴氏族の女性である以上、今城と家持との関係も深かつたであろうことは明らかである。集中において、今城の歌作は短歌八首(8一六〇四、20四四四二、四四四四、四四七五、四四七六、四四九六、四五〇五、四五〇七)、対して今城の伝誦した歌はそれを上回る一二首存在し、全て卷二十に集中している(20四四三六、四四三七、四四三八、四四三九、四四四〇、四四四一、四四四九、四四七七、四四七八、四四七九、四四八〇、四四八二) (水島義治『萬葉集防人歌全注釈』)

(2) 山上憶良の長歌一首に転調がみられるのは、以下傍線を付した句である。

父母を見れば貴し 妻子見ればめぐし 愛し 世間はかくぞこ
とわり もち鳥のかからはしもよ ゆくへ知らねば 穿沓を脱
き棄るごとく 踏み脱きて行くちふ人は 石木よりなり出し人
か 汝が名告らさね 天へ行かば汝がまにまに 地ならば大君
います この照らす日月の下は 天雲の向伏す極み たにぐく
のさ渡る極み きこしをす国のまほらぞ かにかくに欲しきま
にまに しかにはあらじか(5八〇〇)

(3) 「奥処知らず」とうたう歌は次にあげた五首のうち1～3の

三首、「末知らず」とうたう歌は45の二首である。

1 思ひ出でてすべなき時は天雲の奥処も知らず恋ひつつぞ居る

(12三〇三〇)

2 家にてもたゆたふ命波の上に思ひし居れば奥か知らずも

(17三八九六)

3 大海の奥か知らず行く我れをいつ来まさむと問ひし子らは

(17三八九七)

4 梓弓末はし知らずしかれども心は君に寄りにしものを

(12二九八五)

5 梓弓末は知らねど愛しみ君にたぐひて山道越え来ぬ

(12三二四九)

厳密に言えば、45の二首において「末知らず」は結句に置かれておらず、それに続けて「惑ふ(迷ふ)」「恋ふ」といった動詞もとらない。4では「君に寄る」、5では「君にたぐ」ふ、とうたっている。二首によまれた「寄る」「たぐふ」という動詞は、どちらも相手にすっかり自分の身をあずけることを意味している。対して当該歌によまれた「行く」という語は、自分の足で歩いていくという意において、「寄る」や「たぐふ」などの語が持つ甘えを含まない。後述するように、当該歌及びその類歌は「～知らず」とうたう例の中ではやはり特異な表現であるといえよう。